

■教育行政のポイント

イギリス人教師の目から見た“日本の学校”

菱村 幸彦

月刊『教職研修』12月号の書評欄は、ルーシー・クレハン著『日本の15歳はなぜ学力が高いのか？』（早川書房）を取りあげ、「鋭い観察力と洞察力を通して、各国の教育事情が見事に活写されて興味深い」と紹介している。

で、早速読んでみた。ふだん見慣れている日本の学校が、外国人教師の目を通して見ると、違った風景となる。そこがおもしろい。ぜひ教育関係者に読んでほしいので、取りあげてみたい。

集団の調和を大切にす日本

著者は、オックスフォード大学で心理学と哲学を学び、ケンブリッジ大学で教育学の修士号を取得した教育研究者である。ロンドンの中高等学校で3年間教鞭をとった後、2年間にわたってPISA(国際学力調査)で高得点をあげた国々(日本、シンガポール、上海、フィンランド、カナダ)に滞在し教育の実態を調べ、本書を書き上げている。

脚注に付された多数の引用論文を見れば、本書が比較教育の優れた実証的研究であることがわかるが、堅苦しい学術書ではない。現地で学校を訪問し、授業に参加し、教師や父母と話し合い、その間に会ったエピソードを交えて、ユーモアのある文章で綴った旅行記となっている。橋川史氏の訳文もよくこなれていて読みやすい。

著者の目に映った日本の教育の特徴を、私なりに要約すると、概略、次のようになる。

第1は、厳しい規則。中学校では生徒の服装や行動まで細かく規制しているが、日本の母親は、子どもたちがルールと行儀を身につけるための「通過儀礼」として受け入れている。日本文化で「我慢」が重要視されているからだ。

第2は、集団の調和。小学校では「班」が生まれ、勉強も給食も掃除も班の仲間と一緒にする。子どもたちは、集団で必要とされていることを学び、集団で

達成した成果に誇りを持つことを学ぶ。日本の社会は集団の調和を大切にしている。

第3は、教員の異動。日本の公立学校は中学校卒業までは誰もが同じ教育を受けられることを保障している。それを可能にしているのは、優秀な教師が特定の学校に集中することなく、教師を学校間で定期的に異動させているからだ。

第4は、学級編成。日本の中学校は、通常、能力別学級編成を行っていない(イギリスは能力別学級編成が原則)。これは日本の教師が、子どもたちは平等な教育機会を与えられるべきという信念を持っているからだ。

第5は、母親の熱意。日本の母親は、子どもの教育に深くかかわっている。それが子どもの成績に良い影響を与えている。学校は母親の役割に期待して、年間を通して様々な連絡をする。それが学校の努力を補う効果的な方法となっている。

優れた授業の工夫と授業研究

第6は、授業の工夫。日本の教師は、細心に計画した授業の流れに従って問題を生徒が自力で解けるよう仕向けている。教師は、まず、必要な知識を教え、次いで、ステップごとにヒントを出し、子どもが自力で問題を解くように導いている。

第7は、授業研究。日本の教師は、子どもたちに授業内容を理解させる能力に優れている。その秘密は「授業研究」にある。授業研究により授業計画は入念に作成され、評価され、調整され、それが共有財産として誰もが利用できる。

紙幅が尽きたが、最後にもう一つ。著者は、日本では「ゆとり教育」が学力低下を招いたと批判されているが、2015年のPISAで調査した「問題解決能力」は日本が世界のトップであった事実等を挙げて、ゆとり教育を評価している。

(ひしむら・ゆきひこ=国立教育政策研究所名誉所員)

●さらに使いやすく！学校のPDCAサイクルを1冊で管理！《好評発売中！》

2019 スクール・マネジメント・ノート

【企画・編集】教育開発研究所 A5変型判・224頁／定価(本体2,400円)+税

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。

